

第84回

全国スポーツ施設 研究協議大会

令和6年6月20日(木)

開会式

[フォトギャラリー]



主催者あいさつ

公益財団法人 日本スポーツ施設協会
会長 大東 和美



主催者あいさつ

栃木県スポーツ施設協会
会長 荒井 浩己



祝辞

スポーツ庁参事官(地域振興担当) 付
参事官補佐 玉那覇 綾子



歓迎のことば

栃木県生活文化スポーツ部
部長 中村 和史

主催者あいさつ

公益財団法人 日本スポーツ施設協会

会長 **大東 和美**

第84回全国スポーツ施設研究協議大会の開催に当たり、主催者としてごあいさつを申し上げます。

この度は、ご多用のところ、全国各地からご参加を頂き、誠にありがとうございます。ご参加の皆様には、日頃から全国各地において、体育・スポーツ施設の環境整備や管理運営を通じて、スポーツの振興・推進にご尽力を頂いておりますこと、この場をお借りして、心から敬意と感謝を申し上げます。

令和4年4月からスタートした今後5年間のスポーツ施策の方向性を示す「第3期スポーツ基本計画」では、国民がスポーツを「する」「みる」「ささえる」ことを真に実現できる社会を目指し、様々な関係者との連携、協力の下、重点的に取り組む施策が打ち出されています。

一方、全国の体育・スポーツ施設においては、厳しい財政状況のもと、公共・民間を問わず安全・安心な施設づくりや整備とともに、より効率的な管理運営が求められています。

また、スポーツを経済・地域の活性化に資する貴重な地域資源として捉え、国内外のスポーツを取り巻く環境の変化を踏まえながら、各地域の魅力あるスポーツ資源の更なる活用促進や、新たなスポーツ資源の創出等に取り組むなど、「スポーツ」による経済・地域の活性化を推進する動きも出ています。

なお、「第3期スポーツ基本計画」の中では、「性別、年齢、能力等に関係なく、地域において誰もがスポーツ施設でスポーツを行いやすくするため、ハード面の整備だけでなくソフト面での知恵と工夫による積極的な対応も含めた施設のバリアフリー化やユニバーサルデザイン化等について、東京大会を契機に整備された施設の取組を含む先進事例の情報提供等により推進する」とされています。また、「ハード」「ソフト」「人材」の「質」的充実を図るため、「スポーツ施設の事故や老朽化に関する情報提供や、施設の維持管理・運営に関する人材育成、保険制度の普及を図るとともに、施設の構造体、非構造部材の耐震化等の自然災害へのハード・ソフト両面での対応を行い、施設の安全確保を推進する」とされています。このように、今後ますます、全国の体育・スポーツ施設が、我が国のスポーツの振興や地域の活性化に資するなど重要な役割を担うことが求められています。

そのような中、本研究協議大会は、全国の体育・スポーツ施設、行政関係者が一堂に会し、全国のスポーツ施設などに関する最新情報を共有して頂くとともに、スポーツ施設のあり方について意見交換を行い、相互理解を深めることを目的として開催するものです。

全国各地からご参加の皆様には、本研究協議大会を通じ、スポーツ施設に関する諸課題についてご研鑽いただき、今後とも体育・スポーツ施設の整備・充実、安全で効率的な施設運営に、より一層のご尽力を頂きますようお願い申し上げます。

終わりに、本大会を開催するに当たり、スポーツ庁をはじめ、ご共催頂きました栃木県、栃木県スポーツ施設協会並びに関係各位のご協力に心から御礼を申し上げ、あいさつといたします。

主催者あいさつ

栃木県スポーツ施設協会

会長 **荒井 浩己**

開催県といたしまして、一言ごあいさつ申し上げます。

本日は暑い中、栃木県において開催します第84回全国スポーツ施設研究協議大会にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。

本日ここに、公益財団法人日本スポーツ施設協会の大東会長をはじめ、役員、各都道府県体育・スポーツ施設協会、特別会員・賛助会員など多くの関係者の皆様方にご参加をいただき、さらにはご来賓として、スポーツ庁の玉那覇綾子様、栃木県生活文化スポーツ部の中村和史様にご出席いただきました。誠にありがとうございます。全体で210名のご参加をいただき、盛大に開催できますことに感謝申し上げます。

全国スポーツ施設研究協議大会は、全国の体育・スポーツ施設の関係者が一堂に会しまして、スポーツ施設のあり方について検討することができる大変有意義な大会です。本日と明日の2日間となりますが、思い出に残る大会となるよう事務局を務めさせていただきますので、よろしく願いいたします。

本日は、まず特別講演として、ロンドン五輪卓球女子団体銀メダリストの平野早矢香様をお招きいたしまして、「昨日の自分より一歩前へ」をテーマにご講演をいただきます。次に事例発表として、栃木県生活文化スポーツ部スポーツ振興課課長補佐の村田大輔様から「スポーツの活用による地域活性化の取組」、公益財団法人栃木県スポーツ協会 とちぎスポーツ医科学センター センター長の池田達昭様から「とちぎ国体2022レガシー」をテーマにご説明をいただきます。特別講演と事例発表終了後に若干の休憩をはさんで、各都道府県や各職域の皆様が一堂に会しての情報交換会を開催いたします。

明日の視察につきましては、2年前の「いちご一会とちぎ国体・とちぎ大会」の総合開会式・閉会式と各種競技を開催いたしました「栃木県総合運動公園」の施設をまわるコースと、「さくら市総合公園」「栃木県グリーンスタジアム」と昨年開業しました次世代型路面電車「LRT」の車両基地・体験乗車をするコースになります。お好みのコースを堪能していただければ幸いです。

栃木県は、世界遺産に登録されている「日光の社寺」、避暑地「奥日光」「那須高原」など魅力的な観光地がたくさんありますので、是非このあとお楽しみいただければ幸いです。

結びに、第84回全国スポーツ施設研究協議大会が活発な意見交換を通じまして、皆様にとって有意義なものとなりますようご期待いたしますとともに、公益財団法人日本スポーツ施設協会のますますのご発展と会員の皆様やご出席の皆様方のご健勝を祈念いたしまして、開催県としてのあいさつとさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

祝 辞

スポーツ庁参事官（地域振興担当）付

参事官補佐 **玉那覇 綾子**

本日、第84回全国スポーツ施設研究協議大会が盛大に開催されますこと、心よりお祝い申し上げます。また、ご参加の皆様におかれましては、日頃より安全で魅力的なスポーツ施設の管理・運営にご貢献いただいておりますこと、この場を借りてお礼を申し上げます。

特に本日、表彰を受けられるスポーツ施設功労者の皆様、それからスポーツ施設の設計・施工、器具・機材の質的向上に関する優れた取組として、スポーツファシリテーズ大賞を受賞される皆様方には、お礼とお祝いを申し上げたいと思います。

スポーツ庁では、「第3期スポーツ基本計画」のもと、スポーツによる健康増進やスポーツによる地方創生・まちづくりなど各施策を推進しておりますが、各施策の推進にあたってはスポーツ環境の充実が欠かせません。

スポーツ庁としては、スポーツ環境の充実につきまして、住民の誰もが気軽にスポーツに親しめる「場」づくりを推進しております。スポーツを通じて地域を元気にする、あるいはスポーツによって地域の課題を解決するといった「スポーツ・健康まちづくり」の実現に向けまして、スポーツ施設のさらなる「量」的な充実に加えまして、社会や住民のニーズの変化に応じた「質」的な充実についてもなお一層取り組んでまいる所存です。スポーツ施設の社会的な役割・期待がますます大きくなってきていることを実感しておりますところ、皆様が常日頃から取り組まれていることの価値がより高まり、可視化されるようになってきていると日々考えているところです。

一方で、スポーツと組み合わせた観光や地域まちづくりなどによる地域活性化に向けて、スポーツ庁では、全国各地で特色あるスポーツの地方創生・まちづくりの取組を進めているところです。地域の社会課題の解決を促進することで、スポーツが地域社会に貢献し、スポーツ振興への住民の理解と支持をさらに広げて、競技や振興の好循環を実現することを目指しております。引き続き、スポーツツーリズムなどを通じて、交流人口の拡大や地方創生・まちづくりを推進する取組の評価を図るとともに、その運営を担う基盤人材の育成サポートなどを行ってまいります。

今後とも、皆様の新しい取組を応援し、また色々な創意工夫を勉強させていただきながら、より良いスポーツ環境の創出を進めてまいりたいと考えていますので、一層のご協力を賜りますようお願いいたします。

最後になりますが、本大会の開催にご尽力されていらっしゃいます公益財団法人日本スポーツ施設協会、栃木県スポーツ施設協会、独立行政法人日本スポーツ振興センター、栃木県及び関係者の皆様方に深い敬意と御礼を申し上げ、また本会の盛会を祈念いたしまして祝辞とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございます。

歓迎のことば

栃木県生活文化スポーツ部

部長 **中村 和史**

第84回全国スポーツ施設研究協議大会が、ここ栃木県におきまして盛大に開催されますことにお祝い申し上げますとともに、全国各地からお越しいただきました多くの皆様に心より歓迎申し上げます。

また、御参加の皆様におかれましては、日頃からスポーツ施設の環境整備や管理運営に携わられ、スポーツ振興に多大なる御尽力をいただいておりますことに対し、深く敬意を表します。

さて、我が国では少子高齢化が進行しており、子どもたちの体力低下、部活動の地域移行やそれに伴う地域スポーツ団体のあり方、各ライフステージに応じた運動・スポーツへの関わり方など、スポーツをめぐる解決すべき課題が数多くあります。このような中、スポーツ施設についても、安全・安心な施設づくりや効率的な運営に加えて、多様な世代が集う交流拠点としての役割が求められるなど、その重要性が日々高まっているところです。

本県においては、一昨年の「いちご一会とちぎ国体・とちぎ大会」の開催に当たり整備した総合スポーツゾーンをはじめとするスポーツ施設など、両大会の有形・無形のレガシーを継承し、スポーツを活用した本県の地域活性化に向けて、昨年7月に県内の全市町やスポーツ団体、プロスポーツチーム、民間企業などで構成する官民協働の「栃木県スポーツコミッション」を設立し、スポーツ大会や合宿の誘致、スポーツツーリズムの推進等に取り組んでおります。

こうした中、全国のスポーツ施設関係者が一堂に会して、本大会が開催されますことは、誠に有意義なことであり、本日御参加の皆様におかれましては、活発な交流や情報交換を行っていただき、実り多いものとしていただきますことを御期待申し上げます。

結びに、本大会の開催に御尽力いただきました関係者の皆様に心より感謝申し上げますとともに、本大会の御成功を祈念申し上げまして、歓迎のことばといたします。

第7回 スポーツファシリティーズ大賞表彰

[フォトギャラリー]



スポーツ庁長官賞
施設計画部門
沖縄アリーナ
株式会社梓設計



公益財団法人日本スポーツ施設協会 会長賞
施設計画部門
もりやまエコパーク交流拠点施設
株式会社佐藤総合計画 関西オフィス



公益財団法人日本スポーツ施設協会 会長賞
器具・機材部門
環境対応型ウレタン舗装材「レオタンαエンボス SF」
日本体育施設株式会社

令和6年度 スポーツ施設功労者表彰

[フォトギャラリー]

▽表彰状受賞者

加盟団体	55名
特別会員	19名
特別会員部会部会長推薦会社	5社

▽感謝状受賞者

本協会役員等	1名
加盟団体事務担当者	3名
特別会員部会部会長推薦	4名
長期継続特別会員	3社



表彰状受賞者代表

栃木県 藤田 靖夫



表彰状受賞者代表

株式会社モルテン



感謝状受賞者代表

株式会社シミスオクト 都 光哉



感謝状受賞者代表

株式会社東京アスレティッククラブ



代表者謝辞

栃木県 高久 俊昭

昨日の自分より一歩前へ ～卓球から学んだ挑戦することの大切さ～

2012 ロンドン五輪卓球女子団体銀メダリスト
ミキハウススポーツクラブアドバイザー

平野 早矢香



はじめに

私は2016年4月に現役を引退し、今はミキハウスのスポーツクラブアドバイザーとして、全国各地で卓球教室や講演の仕事、最近ではメディアで解説やスポーツコメンテーターをさせていただいている。

ご参加の皆さんには、日頃からスポーツ施設の環境整備や管理・運営、スポーツ振興にご尽力いただき、アスリートの立場からお礼を申し上げたい。

卓球と出会ってできた大きな目標

私がなぜ全日本選手権で5回優勝し、世界選手権やオリンピックの団体戦でメダルが取れたのか。私の経験をもとに皆さんにお話しさせていただきたい。

両親が卓球をしているのを見て、私もやりたいと5歳で卓球を始めた。卓球にのめり込むきっかけになった大会が、全日本選手権の小学生の部だった。2年生以下の部で初めて全国2位になり、両親や先生方がすごく喜んで褒めてくれたが、私自身は、表彰台の高い所で優勝カップを掲げる友達がすごくうらやましかった。「同世代の中でまず日本一になりたい」。これが初めての大きな目標だったが、小学生の部の最高成績は2年生と4年生の2位に終わった。

小学校卒業と同時に一つの大きな転機を迎えた。

栃木県の中学・高校には強豪校と呼ばれる学校がなく、トップを目指す選手は県外の学校に卓球留学することが多かった。私もとにかく中学・高校の6年間で日本一になりたいという強い思いがあり、最終的には両親の反対を押し切って、宮城県の仙台育英秀光中学校に進学することを決めた。

大事な決断はいつも自分で

私の卓球人生の中では、大きな決断がいくつかあって、初めの決断は中学進学、次に高校卒業と同時にミキハウスに入社したこと、そして一番大きな決断は、現役引退を決めたことだ。

アスリートはシビアな世界で、結果が伴わなければ全く評価されない。私も全日本選手権で5回優勝したが、初戦負けしたこともあり、本当にいろいろな時期を経験した。26年間の現役生活を振り返ったとき、最後は自分がどうなりたいたのか、どこを目指すのかを考え、全て自分の意思で責任を持って決断してきたことが、最終的に後悔のない現役生活やスポーツ人生につながったと感じている。

中学・高校時代

強い覚悟を持って進学した仙台育英秀光中学校で

の3年間を振り返ると、卓球の技術強化は、小学生のころとは比べ物にならないほどレベルが上がったので、全力を尽くせば何とか日本一に届くという気持ちで過ごした。しかし、全国中学選抜卓球大会（全中）での成績は、1年生でベスト8、2年生でベスト16、勝負の3年生では団体も個人も3位と、結局一度も日本一を獲得することができなかった。

私は一度だけ、中学3年の全中が終わったところに「私は何をしたら日本一になれるのですか。これ以上頑張ることはできません」と、監督に思いをぶつけたことがあった。そのときに監督がかけてくれた言葉は、今もよく覚えている。「中学・高校の6年間は、将来日本のエースになって世界のトッププレイヤーと戦える基礎づくり、土台づくりだ。悔しさは当然あるだろうが、もう3年間一緒に頑張ろう」と。それぐらい熱い気持ちで指導してくださる先生方だったので、高校も仙台育英に進学した。

私が初めて日本一のタイトルが取れたのは、高校1年生のときだった。高校2年生以下の全日本選手権ジュニアの部で優勝し、やればできるという自信を得た。一つの目標を達成するためには、これだけ長い時間真摯に目標と向き合ってやっと達成できるかどうかなのだというのを感じ、すごく大きな経験をさせてもらったと思っている。

日々前進

当時から、私が心の中で非常に大切にしている言葉がある。それは「日々前進」だ。

中学・高校あたりから、まわりの選手と自分を比べることを一切やめて、昨日の自分と今日の自分を比較することにした。本当に小さな積み重ねではあるが、まずは昨日の自分に勝つという気持ちで、考えて工夫して挑戦することに意識を向けて、ずっと現役生活を送ってきた。

社会人チームに入って

中学・高校までは同世代の中で日本一になりたいと思っていたが、今度はシニアの部で世界で戦える選手になりたいと目標が大きく変わり、卒業と同時にミキハウスに入社させていただくことになった。

当時からミキハウスの卓球部にはオリンピックが在籍し、卓球部のみならずクラブ全体が世界に目を向けて強化していることから、そこに身を置くことが世界への一番の近道だと考えた。

自分自身を変え続ける

入社後は、自分自身を変えるということに取り組んだ。まず一番初めに変えたのは、卓球の用具で、それまで一度も使ったことのない用具に一新した。

二つ目に変えたのは技術だ。それまで一度も出したことのない新しいサーブを身につけるべく練習に取り組んだ。私は18歳から25～26歳までが一番よく練習した。特に1年目は、とにかくサーブ練習だけの時間を作り、およそ1年かけて新しいサーブを作り上げた。

三つ目は、体の使い方を変えた。合理的な体の使い方を研究するため、古武術の先生に違う角度からアドバイスいただいた。とにかく卓球が強くなるために何かプラスになることを探し、必要なところを取り入れた。

最後に四つ目で、卓球はメンタルが非常に重要だといわれるため、勝負に対する心構えを学びたいという思いで、桜井章一さんという麻雀の世界では非常に有名な「雀鬼」と呼ばれる方にアドバイスを求めるということもあった。一番心に残っているアドバイスは「試合では流れをつかむ、流れをものにすることが一番重要だ」というものだ。現役時代の私は割と逆転勝ちの試合が多く、そういう試合では、必ずと言っていいほど流れが変わるタイミングが

あった。桜井さんのアドバイスがなかったら、試合の流れというところには目を向けなかったと思う。

北京大会での経験

私は2008年の北京と12年のロンドンの2回、オリンピックに出場することができた。

北京では、団体戦初戦の相手はオーストラリアだった。自分たちの力を出し切れれば3対0で勝てるくらいレベルの差があったが、第一試合を任された私はゲーム中、サーブを出すときの手の震えが止まらなかった。現役時代でこんな経験をしたのは最初で最後で、オリンピックの特別感というか重みを感じた。

その後、日本女子はメダル決定戦まで何とか勝ち進んだが、最後は韓国に0対3で敗れて4位入賞。メダル獲得ならずで北京大会を終えた。

ロンドン大会までの準備

その4年後のロンドンで、日本卓球界初の銀メダルにたどり着いたわけだが、メダルが取れなかった北京とメダルが取れたロンドンで一体何が違ったのか。一つだけ大きく違っていたのは大会までの準備だった。

北京大会までの4年間は、私はまず日本代表権を獲得するため、2008年1月の世界ランキングで日本女子上位2名に入るという目標を掲げた。ありとあらゆるワールドツアーに参戦して、現役時代には数えてみると39カ国、試合があればどこにでも行った。目標通り日本代表となり、そこから本戦までの半年間はメダル獲得を目指して強化したが、結局は代表を目指した4年間だった。

ロンドン大会までの4年間は、北京での悔しさから、もう一度オリンピックに出場できるのであれば絶対にメダルを取るという目標を掲げて、日本女子チーム全体で取り組んだ。まずはメダルを取るため

に勝たなければいけない対象国を絞った。当時から非常に強かった中国は除いて、韓国、香港、シンガポールのうち一つでも勝たなければ絶対にメダルは取れないと仮定して、対象をこの3カ国に絞った。

さらに、卓球団体の代表選手は1カ国3名だがスペインが4年と長いので、1カ国4名ずつ計12名の選手に対象を絞った。この12名について、かなり具体的に細かく徹底的に分析し戦術を固め、戦術を実行するために必要な技術や足りない技術を練習した。ある意味、逆算方式の強化に4年間取り組んだ。

チーム一丸となって、この12名に勝つということで取り組んだ結果、北京大会のときには世界ランキング5位だった日本女子は、ロンドン大会を迎える際には2位まで上がっていた。第1シードは中国で、第2シードは反対側のゾーンになる。第2シードを確保するというのも、実は私たちがもう一つのミッションだった。準決勝でメダルのワンチャンスがあり、もし負けても3位決定戦がある。最終的には、準決勝でシンガポールに勝ってメダル獲得が決まった。

スポーツは人生を豊かにする

ロンドン大会の後、2016年のリオ大会でも代表を目指して取り組んだが、最終的には代表にはなれなかった。もう一回オリンピックにチャレンジし、地元開催の20年東京大会まで現役を続けるどうか、当時はとても迷ったが、最終的には16年4月をもって引退を決めた。

コロナ禍を経験する中で、スポーツは本当に人生を豊かにするものだと感じた。トップを目指すだけがスポーツをする意義ではなく、健康な体づくりや人生の楽しみ、またスポーツを通じた学びという点でも、私自身がスポーツから学んできたことが非常に多かった。これからも、多くの方にスポーツに触れてもらえるような活動を続けていきたいと思っている。

スポーツの活用による地域活性化の取組

栃木県生活文化スポーツ部
スポーツ振興課 課長補佐

村田 大輔



いちご一会とちぎ国体・とちぎ大会のレガシーを 継承した「新しいとちぎ」づくり

令和4(2022)年10月、第77回国民体育大会「いちご一会とちぎ国体」が42年ぶり、第22回全国障害者スポーツ大会「いちご一会とちぎ大会」が初めて本県で開催された。

いちご一会とちぎ国体は、令和元(2019)年の茨城国体後、鹿児島県、三重県のコロナ禍による2回の延期や中止を経て3年ぶりの開催となり、全国から選手、監督、関係者、観覧者合わせて約46万人にご来県いただき、日本一のおもてなしや環境配慮への取組、徹底した新型コロナウイルス感染防止対策などにより、未来につなぐ大会となった。

両大会を契機とした県民のスポーツへの機運の盛り上がりや、国体開催にあたって整備、改修した県や各市町の施設など、有形・無形のレガシーを確実に継承し、「新しいとちぎ」づくりにつなげていくため、令和5(2023)年3月「とちぎスポーツの活用による地域活性化推進戦略」を策定した。

とちぎスポーツの活用による地域活性化推進戦略

この戦略は、スポーツを活用した地域活性化に向けて、充実したスポーツ施設や多くの競技にわたり

地域に根差したプロスポーツチーム、東京からのアクセスの良さや豊富な自然、温泉、食など本県の有する資源や強みを踏まえ、県として取り組む施策の方向性を示したものである。

具体的な取組としては、新たにスポーツコミッションを設立し、大規模大会やスポーツイベント、合宿等の誘致、スポーツと組み合わせた観光・地域づくり等の推進、テーマ別スポーツツーリズムの推進などを掲げ、スポーツツーリズムの推進による地域活性化の実現を目指す内容となっている。

こうした取組が評価され、昨年11月にスポーツ庁の「スポまち！長官表彰2023」を受賞することができた。

栃木県スポーツコミッションの設立

戦略で掲げたスポーツ大会、合宿等の誘致や観光・地域づくり等に向けて、中核となって推進する体制整備や組織が必要となる。

そこで、令和5(2023)年7月31日に、スポーツと観光等の他産業をつなげる役割を担う新たな組織として、官民連携により「栃木県スポーツコミッション」を設立し、地域資源を生かしたスポーツツーリズムの推進により、県内外の交流人口の拡大や地域活性化に取り組んでいるところである。

現在の栃木県スポーツコミッションの構成団体は、県内のプロスポーツチーム7チーム、26自治体（県と25全市町）、県内の大学等6団体、ゴルフ場等を経営しているセブンハンドレッドやBCリーグ栃木ゴールデンブレーブスの運営母体の親会社であるエイジェックなど、スポーツツーリズムにゆかりがある企業やメディア関係など8団体、スポーツと組み合わせた観光・地域づくりという面から、栃木県観光物産協会及び県内市町の観光協会26団体、日本クリケット協会、県とともに事務局を担う栃木県スポーツ協会で、計75団体となっている。

栃木県スポーツコミッションの取組方針

栃木県スポーツコミッションは、取組方針として、①大規模大会を含む様々なスポーツ大会・イベント等の誘致、②スポーツ合宿等の誘致、③テーマ別スポーツツーリズムの推進、④スポーツと組み合わせた観光・地域づくり等の推進、⑤県民協働によるスポーツツーリズムの推進、の大きく5つの柱を掲げている。

以下、それぞれの具体的な内容について説明する。

大規模大会を含む様々な

スポーツ大会・イベント等の誘致

スポーツ大会やイベント等の誘致に際してのインセンティブとして、県内で新しく開催されるスポーツ大会等に対して開催費用の一部を助成する補助制度を創設した。

この補助金は、①大会等開催前に栃木県スポーツコミッションと開催に向けた協議が行われていること、②県内で大会等が開催されること、③すでに県内で行われている大会ではないことを要件とし、大会の参加者数や観客数、大会の種別（国内・国際）により設定した交付限度額の範囲内で、大会等開催

に要した経費総額の2分の1を助成するものである。例えば、観客が5,000人以上の国際大会である場合、最大350万円の補助金が交付される。昨年度は、全国レベルの大会10件を誘致し補助金を活用いただいた。今年度も現時点で4件の実績をあげている。

スポーツ合宿等の誘致

スポーツ合宿等の誘致についても、合宿費用の一部を助成する補助制度を創設した。昨年度から相談窓口を設けており、栃木県スポーツコミッションの誘致活動により、県外に活動拠点のあるスポーツ団体が県内のスポーツ施設を使って合宿をする場合に補助金を交付する。

補助対象経費は、宿泊費用1人1泊1,000円、1団体1回50万円以内としている。このような補助金は、関東近県ではあまり例がないこともあり好評で、昨年度は、7月からの約8カ月で60団体、4,881人泊の助成をさせていただいた。今年度も現時点で2,000人泊の実績があがっている。

また、合宿を誘致するにはプロモーションが大事ということで、昨年度、栃木県スポーツコミッションの公式ホームページを立ち上げ、県内のスポーツ施設や宿泊施設などを広くPRしている。現在、県内のスポーツ施設107件、合宿所等11件の宿泊施設をホームページに掲載しているが、県だけではなく、県内全25市町においても随時最新情報に更新できる仕掛けになっている。施設の情報以外にも、お役立ち情報やブログで県内での合宿の事例などを紹介している。

さらに、各市町がPRしたい施設を網羅した「SPORTS CAMP GUIDE」というパンフレットも作成した。おすすめの観光地なども掲載してPRに努めているところである。

昨年度は、栃木県スポーツコミッションの設立、補助制度の創設、公式ホームページの立ち上げ等、

まずは体制整備に取り組んできたが、今年度からは、より戦略性を高めた誘致活動を行っていくため、県と25市町、栃木県スポーツ協会、栃木県観光物産協会で栃木県スポーツコミッション内に「スポーツ大会・合宿等戦略的誘致チーム」を設置した。

「とちぎスポーツ医科学センター」や今年度新たに創設された栃木県スポーツコミッションとの連携によるエクスカッションへの助成も活用しながら、県内施設の棚卸し、ターゲットの選定などを行い、県内開催が可能なスポーツ大会・合宿等の戦略的誘致による誘客促進を図っている。

テーマ別スポーツツーリズムの推進

本県において、スポーツツーリズムが普及し、継続的に推進されるためには、流行や消費者ニーズに応えるテーマ別スポーツツーリズムへの対応が重要であることから、現在取り組んでいるサイクルツーリズムやアウトドアツーリズムに加え、外国人のニーズが高い武道など、新たなテーマ別ツーリズムを検討している。

昨年度開催した有識者による検討会から、本県は、日光東照宮武徳殿や那須与一伝承館など、武道に関連する歴史的・文化的資源が豊富にあり、ユウケイ武道館をはじめ、武道関係施設が県内各地に存在するなど、武道と観光を組み合わせた武道ツーリズムに取り組むことが可能な環境にあることから、積極的に推進すべきであるとの報告をいただいたところであり、国においてもアウトドアツーリズムと武道ツーリズムが重点テーマに設定されていることも踏まえ、他自治体の事例も参考にしながら、本県ならではの取組となるよう検討を進めているところである。

スポーツと組み合わせた 観光・地域づくり等の推進

県内には、野球、サッカー、バスケットボール、アイスホッケー、自転車、3×3の6競技のプロスポーツチームがあり、年間38万人超の観客を動員するなど、交流人口の拡大に大いに貢献している。栃木県スポーツコミッションがスポーツと組み合わせた観光・地域づくり等を推進するにあたって、プロスポーツチームの高い認知度・発信力を活用した誘客促進や地域のにぎわい創出につなげていくため、栃木県スポーツコミッション内に「とちぎプロスポーツ活性化検討チーム」を設置し、活性化に向けた方策の検討や各チームが活動しやすい環境づくりに取り組んでいる。

県民協働によるスポーツツーリズムの推進

大会等の誘致にあたっては、運営を支えるボランティアが非常に重要な存在となる。「いちご一会とちぎ国体・とちぎ大会」では、運営スタッフ、情報支援スタッフ、選手団サポーターとして、延べ約7,000人のボランティアにご活躍いただいた。そのレガシーを次へつなげていくため、昨年度、新たにボランティア制度を創設し、スポーツボランティアの登録を推進しているところである。

現在120名の登録をいただいている。栃木県スポーツコミッションは、ボランティアの募集依頼があった大会主催者とボランティア登録者をつなぐ役割を担っており、スポーツイベントや自転車のロードレース等でボランティアの方に活躍いただいている。

いちご一会とちぎ国体・とちぎ大会レガシー基金

「いちご一会とちぎ国体・とちぎ大会」のレガ

シーを継承し、本県のスポーツを活用した地域活性化に向けた取組を継続的に行うための財源の確保や、趣旨に賛同いただける県民・企業等から寄附を募り、今後の施策に反映させること等を目的として、「いちご一会とちぎ国体・とちぎ大会レガシー基金」を令和5（2023）年4月に設置した。

5億円を基金として積み立て、スポーツの普及振興及びスポーツを活用した地域の活性化に資する取組の財源として活用するとともに、取組にご賛同いただける県民や企業からふるさと納税制度や企業版ふるさと納税制度を活用した寄付についてPRを進めている。さらに、地元の足利銀行の協力をいただき、法人が私募債を発行する際に手数料の一部を当基金に寄付する「2024とちぎ未来債」の取り扱いが開始されている。

とちぎ国体2022レガシー ～健康寿命日本一に向けたTISの貢献～

公益財団法人栃木県スポーツ協会
とちぎスポーツ医科学センター センター長

池田 達昭



とちぎスポーツ医科学センター（TIS）の紹介

とちぎスポーツ医科学センター（TIS）は、競技スポーツにおける競技力向上の支援をするための施設で、「測定評価」を活用した課題解決の仕組みを有していることが特徴である。

2020年設置後、2年間で延べ1万5,019人がアスリートチェック（体力測定）、動作分析、トレーニングリハビリテーション指導、栄養指導、心理指導、医事相談、講習等に利用している。東京都北区にある「ハイパフォーマンススポーツセンター」のネットワーク連携機関に指定されており、全国にある9施設のうち一番初めに認定された。TISには、私も含めてハイパフォーマンススポーツセンターの出身者が6名（常勤3名、非常勤3名）従事している。

TISサービスの流れは、県の条例に記載されており、体力測定と測定評価が中心となっている。まず「アスリートチェック」を行う。これはスポーツ版人間ドックのようなもので、各人の特徴や弱点などを見つけ、その測定結果をもとに「サポートミーティング」で各分野の専門スタッフが支援内容を検討し、その知見を「フィードバック」する。そして現場での「トレーニングの実施」というPDCAサイクルを回していくのが、TISの特徴の一つといえる。

体育・スポーツのもつ独自の価値を享受しながら、生涯にわたって、自分の力で、自分の健康、体力、競技力を「高めていくことのできる能力」を向上させる。なるべく自分でできるようにするというのがTISのもう一つの特徴で、目標に向かって自らの力で考えられる、課題解決できるアスリートを養成するべく、競技力向上に関わる「知恵の開発」に取り組んでいる。

TISの理念

われわれの理念は「体育・スポーツの『実践』で人々を幸せに」することである。災害に対する予防・克服（＝平和な生き方）や超少子高齢化社会（＝たくましく生きる人生）、あらゆる年齢の人々の多様なライフスタイルが認められる「生き方の養成」と身体的能力、時間や距離といった制約を革新的な技術によって解決し、子どもを大切にする「社会づくり」という理念のもと、ミッション（ゴール）を、①「国体」「子どもの体力」「健康寿命」の三つの日本一と今後数年から数十年先に訪れるであろう「宇宙社会における体育の実現」、②体育・スポーツを通じた「実践力（考える力）」の養成、③TISのハブ機能（地域連携）を活用し、さまざまな形で県内関係者および関連施設に貢献することに置

いている。

そして、その達成のためのバリュー（アプローチのしかた）としては、①実践と科学との融合（実践知、暗黙知の見える化と現場における科学知の活用、トレーニング実践の最適化）で、AIなども使ってトレーニング実践を手伝って最適化する。②現場活動のプロセスに即した科学知の活用で、現場に即してパフォーマンス、トレーニング、コンディショニングの3つのサポート分野に分けてアプローチする。また、課題解決のプロセスも、ただ単にPDCAを回すだけでなく、パフォーマンス構造、目標、トレーニング手段・方法、トレーニング実践、試合行動、測定評価という7つに整理してプロセスを回していくことによって現場の活動を理解する。③多分野の密な連携による包括的サポートで、各分野の専門家が密に連携し、諸科学を有機的に融合化させてサポートしている。

健康寿命日本一に向けた取組

県では、とちぎ国体2022年のレガシーとして、「健康寿命日本一に向けた取組」を推進している。TIS設置後、国体までの3年間の活動で得られた知見（科学知、実践知、暗黙知など）を、子どもの体力日本一（目標2023-27年）、高齢者の健康寿命日本一（目標2028-32年）に応用・転化・継承し、目標を達成しようと頑張っているところである。

わが国に見られる諸体育観

わが国では、「スポーツ型体育観」と「健康・体力型体育観」、「生活・生存型体育観」の3つの体育観がみられる。文部科学省やスポーツ庁はスポーツ型体育観、厚生労働省は健康・体力型体育観となる。そして、活動・栄養・休養の3本柱を掲げ、個人的社会的にみて望ましい生き方のできる能力・態度育

成を重視し、生活全体にわたる現象を勘案したのが、TISの生活・生存型体育観と言える。

「長生き」の一般論

生活・生存型体育観について詳しく説明する前に「長生き」の一般論を共有しておく。

予備力・免疫力・回復力が低下し、複数の病気を抱えやすく、恒常性維持機能が低下する。そして毎日どこかが痛いのに症状がはっきりしないというのが高齢者の身体的な特徴で、私は「長生き」の秘訣は、ぼっちゃり、おおらかで話し好き、65歳を過ぎたら好きなものを食べ、プチ筋トレをやることだと思う。

「長生き」に伴う身体の変化としては、フレイル（筋肉虚弱）とサルコペニアが挙げられる。フレイルは介護を必要としないが、日常生活動作や認知機能に衰えが見られる状態。サルコペニアは加齢によって筋肉が減少して、日常生活に支障が出る状態をいう。食欲が低下して低栄養になると体重と筋肉量・筋力が減少してサルコペニアになる。そうになってしまうと基礎代謝量が低下してエネルギー消費量も低下するので、食欲が低下してガリガリになって、要介護や寝たきりになってしまう。

こうした悪循環のフレイルサイクル対策として、皆さんにぜひ覚えていただきたいのは、先ほども言った65歳を過ぎたら好きなものを食べようということ、痩せていることは健康リスクそのものとなるということである。食事のポイントはとにかくカロリーを摂ることで、ポテトチップスは適度に脂も入っていて、少量でカロリーが摂取できるのでぜひ食べてほしい。

また、筋肉を増やすためにステーキのようなタンパク質を摂取してほしい。そして、体重を維持または増加させることを優先してご飯を食べてほしい。ただ、急な食生活の変化は体に負担がかかり、血糖

値の急激な変化は認知症リスクを高めるという研究結果も出されている。さらに、意識して肉や魚などのタンパク質を含む食事にしていただくと効果抜群だと思う。

筋肉をつけるためには、タンパク質の摂取量を増やすのが一番で、20%増やすとフレイル発症率が30%下がるといわれている。タンパク質の摂取目安は最低で体重1kg当たり1g、理想は体重1kg当たり1.5gとされている。そして、プチ筋トレで筋肉を増やす。ヒラメの速筋（瞬発力）とマグロの遅筋（持久力）とよくいわれるが、遅筋はウォーキングやサイクリングで鍛えられ、速筋は筋トレなどで鍛えられる。キーワードは「タンパク質の摂取と筋肉づくり」である。

ただ難しいのが、高齢になってくると、知識の理解や運動実施のモチベーションがなかなか上がらないという人が多くなる。そこで、もっと日常に根付いた方法はないか、多くの人に役立つ方法はないかということで考えたのが、TISの生活・生存型体育観である。

わざわざ施設に行かなくても、普段の生活や庭いじり、農作業、自転車通勤や子どもと遊ぶこと、公民館での雑談などが、すごく健康に役立つのではないかとわれわれは思った。そして、①普通に生きているだけでとても幸せである（と気づけていないことが多い）。②人は誰でも自分の目指す生き方に即した人生達人になれる可能性がある。③長寿には、競技スポーツ、スポーツ運動が必須ではない可能性がある。④体育・スポーツ分野に、人生達人になれるような体育観のヒントが隠されている可能性がある。⑤人生に伴う恐れが多い諸災害の予防・克服にも積極的に寄与する体育観の確立が必要であるということで、われわれの理念ができあがった。特に、高齢者にはスポーツが必須ではない可能性があるということだ。

生活・生存型体育観（全生活型体育観）のすすめ

ここまでの話を背景として、スポーツ型体育観から脱却し、生活・生存型体育観（全生活型体育観）を提言したい。

繰り返しになるが、高齢者にとってまず大事なのは生活運動で、日常生活の全体を活動・休養・摂取の3本柱によってしっかり整える。そして、精神的なものもしっかり整えた上で、余裕のある人や物足りない人はスポーツや運動をすればよい。70～80歳でサッカー大会やマラソン大会に出ている高齢者もたくさんいらっしゃるが、それはそれですごく貴重だし良いことなのだが、それ以外の多くの高齢者の場合は、やはり日常生活を充実させることが大事なのではないかと思っている。

まとめ

健康寿命日本一に向け、TISではまず、①スポーツ型体育観からの意図的な脱却を図っている。ますます高齢者が多くなる中で、小中学校からの運動・スポーツを考えるのに加えて、高齢者にどうアプローチするかを考え、高齢期からスタートする生活運動型体育観を構築していく必要があるのではないか。それから、②布団の上げ下げや階段の上り下り、農作業など、生活運動がかなりの効果を発揮する。生命体力（病気をしない体力）を優先し、行動体力（競技力）は補助的に鍛えていけばよい。そして、③活動生活、摂取生活、休養生活の3本柱で全生活における総合的・包括的な体育を通して、身体を育成する。さらに、④精神活動の体育化というものをしっかり考えて、活動生活の体育化の一環として明確に位置付けること、つまり脳活やコミュニケーションが非常に重要で、これをしないと認知症の高齢者が増えることになる。

閉会式

次回開催県あいさつ

鹿児島県スポーツ施設協会

会長 **肥後 昭文**



次回開催県といたしまして、ごあいさつ申し上げます。

本日は、ここ栃木県におきまして第84回全国スポーツ施設研究協議大会が盛大に開催されましたこと、誠におめでとうございます。大会準備にご尽力いただきました日本スポーツ施設協会、栃木県スポーツ施設協会、大会実行委員会など関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

本日を振り返りますと、特別講演におきまして、ロンドン五輪卓球女子団体銀メダリストの平野早矢香様に「挑戦することの大切さ」と題して、多くのエピソードとともに貴重なご講演をいただきました。あらためてスポーツは人と人をつなぎ、人生を前向きにし、人々の生活を豊かにしてくれることをご教授いただけただけではないでしょうか。また、事例発表では、栃木県を挙げて取り組むスポーツコミッション事業や栃木県スポーツボランティア制度の構築など、地域の活性化やとちぎ国体のさまざまな取組のお話を聞かせていただきました。さらに、TISのお話も楽しく、我々スポーツ施設関係者としながらも、活用づくりや行政・民間とのさらなる連携ということを考えさせられました。明日の「カンセキスタジアム」や「栃木県グリーンスタジアム」など、両コースの視察も楽しみにしております。

さて、来年の第85回大会は鹿児島県での開催が決定し、私共もPRしていきたいと思っております。鹿児島県ですが、九州最南端で南北600kmの非常に広大な地形を擁しております。世界自然遺産の「屋久島」「奄美大島」等、世界文化遺産の「明治日本の産業革命遺産」の3つの世界遺産を有し、桜島や開聞岳、美しい島々といった自然や温泉も豊富で、個性豊かな観光資源に恵まれております。日本一の鹿児島黒牛、黒豚、ブリ、カンパチ、お茶、さつまいも、本格焼酎など世界に誇れるグルメもたくさんありますので、楽しみにしていただきたいと思っております。

また、スポーツに目を向けますと、アスリートの合宿を多く受け入れており、スポーツ活動も熱心に行っております。栃木県の取組も大変参考になりました。鹿児島県は、「南の宝箱 鹿児島」というキャッチコピーを設けています。ぜひ来年お越しいただきますようよろしく願いいたします。

結びになりますが、参加者の皆様、本当にご参加いただきありがとうございました。次回大会でも皆様方と素晴らしい協議ができることを楽しみにしております。また、このあと開催されます情報交換会を含めた本研究協議大会がさらなる活発な交流を通じて、皆様にとっても有意義なものになりますよう期待いたします。そして、日本スポーツ施設協会のますますのご発展と会員の皆様、有資格者の皆様のご健勝を祈念いたしまして、次回開催県のあいさつといたします。

本日はありがとうございました。

令和6年6月21日(金)

施設視察

2日目は、AコースとBコースに分かれて、Aコースは栃木県総合運動公園（カンセキスタジアムとちぎ、とちぎスポーツ医科学センター、日環アリーナ栃木）、Bコースはさくら市総合公園、栃木県グリーンスタジアム、LRT宇都宮車両基地を視察した。



カンセキスタジアムとちぎ

栃木県総合運動公園北エリアにあるカンセキスタジアムとちぎは、丘の上に建つ外観が特徴的で、とちぎ国体・とちぎ大会の総開・閉会式、陸上競技の会場となった。陸上競技やサッカー、コンサートや各種イベントなど多目的に利用され、観客席数は約2万5,000席を確保している。日本陸上競技連盟の第1種公認競技場でWA（世界陸連）クラス2認証を取得しており、国際大会開催も可能。Jリーグスタジアム基準もクリアしている。



とちぎスポーツ医科学センター（TIS）

カンセキスタジアムとちぎ内にあるとちぎスポーツ医科学センター（TIS）は、「ハイパフォーマンススポーツセンター」のネットワーク連携機関に指定されている。測定室（パフォーマンスルーム）、コンディショニングルーム、トレーニング室を備え、アスリートチェック、パフォーマンス分析、相談・指導サポートなどが行われている（詳細は前述の事例発表Ⅱ参照）。



日環アリーナ栃木

栃木県総合運動公園東エリアにある日環アリーナ栃木は、栃木を象徴する大谷石採掘場をイメージした外観が特徴的で、メインアリーナ、サブアリーナ、屋内水泳場、ウェルネスエリア、および体育館分館のエリアで構成されている。メインアリーナは、バスケットボール4面分の広さを有し、観客席数は約5,000席（うち固定席3,000席）、サブアリーナはバスケットボール2面分、観客席数は約300席を確保している。昇降式の防球ネットにより、メインアリーナは4分割、サブアリーナは2分割での利用が可能。また、ナショナルトレーニングセンター水泳飛込競技強化拠点施設に指定されている屋内水泳場は、日本水泳連盟公認の50mプールと25m・飛込兼用プールを配置し、観客席数は約3,000席。50mプールには可動床と可動壁、25mプールにも可動床が採用され、さまざまな利用形態に対応できる。とちぎ国体・大会では、メインアリーナは体操とバスケットボール、サブアリーナはバスケットボール、屋内水泳場は水泳の各競技会場として利用された。



栃木県グリーンスタジアム

栃木県グリーンスタジアムは、サッカーやラグビーの全国規模の大会や国際大会を開催できる環境、設備が整っている。およそ1万5,000人が観戦できる観客席、大型映像装置などを有し、とちぎ国体・とちぎ大会ではサッカー会場として使用されたほか、天皇杯予選やサッカー公式戦等も開催されている。メイングラウンドは西洋芝を採用しており、週5日は芝のメンテナンスに充てるなど徹底した管理運営が行われている。また、サブグラウンドには人工芝が採用されている。



さくら市総合公園

さくら市総合公園は、さくらスタジアム（サッカー場兼陸上競技場）、野球場、テニスコート、ゲートボール場、バスケットボールコート、壁打ち施設（さくらスポーツウォール）などさまざまな施設を配置している。さくらスタジアムは、全天候型ウレタントラック400m×8レーン（100m×9レーン）、ティフトン芝のフィールドがあり、とちぎ国体・とちぎ大会のサッカー会場として使用された。陸上競技やサッカーのほか、グラウンドゴルフ、ゲートボールなどにも利用されている。



LRT 宇都宮車両基地

昨年開業した「芳賀・宇都宮LRT（次世代型路面電車システム）」。これまでの路面電車と比べて速度が速く、車内に段差がない低床車両のため、高齢者や障がい者にもやさしく、走行時の騒音や振動がほとんど感じられない。国内外からの視察依頼も多く、地域活性化事業の一つとして注目が集まっている。

